京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-4

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－四

日野谷寺町遺跡

日 野 谷 寺 町 遺 跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

日 野 谷 寺 町 遺 跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、（仮称）日野谷寺町計画に伴う日野谷寺町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

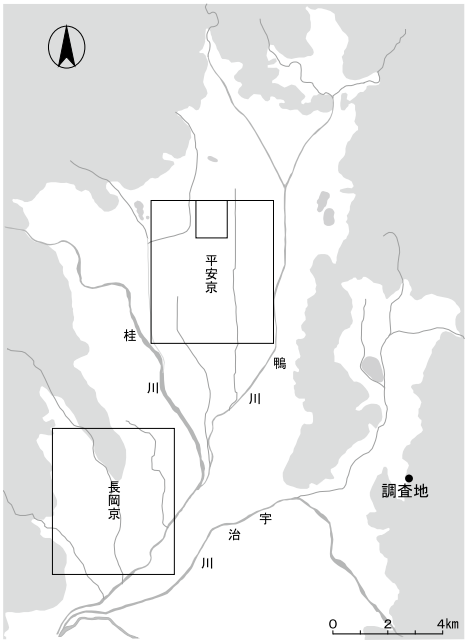
令和３年11月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	日野谷寺町遺跡　（京都市番号　20 S 584）
2	調査所在地	京都市伏見区日野谷寺町81-１、82-１
3	委　託　者	株式会社フロンティアホーム　代表取締役　河内春輝
4	調 査 期 間	2021年５月17日～2021年６月11日
5	調 査 面 積	233.5㎡
6	調査担当者	松永修平
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「石田」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付した。
13	本 書 作 成	松永修平
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 4
（１）基本層序 …… 4
（２）遺　構 …… 4
４．遺　　物 …… 8
（１）遺物の概要 …… 8
（２）土器類 …… 8
５．ま と め …… 9
（１）今回の調査成果 …… 9
（２）昭和59年度の調査成果 …… 9

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査区全景（北東から）
２　調査区下段全景（東から）
３　溝16（北東から）

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：600）　……　2
図３　調査前全景（北東から）　……　2
図４　作業状況（北東から）　……　2
図５　調査区北壁・西壁断面図（１：80）　……　5
図６　調査区平面図（１：150）　……　6
図７　柵１実測図（１：40）　……　7
図８　溝16断面図（１：40）　……　7
図９　土器実測図（１：２）　……　8
図10　今回調査及び昭和59年度調査遺構配置図（１：2,500）　……　10
図11　昭和59年度調査SD452出土土器実測図（１：４）　……　11
図12　墨書土器赤外線写真（図11－１）　……　11

表　目　次

表１　遺構概要表　……　4
表２　遺物概要表　……　8
表３　昭和59年度調査　建物一覧表　……　10

日 野 谷 寺 町 遺 跡

1．調査経過

本調査は、（仮称）日野谷寺町計画に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、京都市伏見区日野谷寺町81-１、82-１に位置し、日野谷寺町遺跡の範囲内である。工事に先立ち、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が、試掘調査を行ったところ、遺構の存在が確認されたことから、原因者である株式会社フロンティアホームに対して発掘調査の指導が行われた。調査は、株式会社フロンティアホームから委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査は、令和３年５月17日から開始した。まず、重機を用いて地山面まで掘削した後、人力で遺構の検出及び掘り下げを行った。

調査の結果、鎌倉時代から室町時代の柱穴列と溝などを検出した。検出した遺構は、実測・写真による記録を行った。記録作業の終了後、６月10日に埋め戻しを行い、6月11日に全ての作業を終了した。

調査中は、適宜文化財保護課の臨検を受け、また検証委員である京都大学の伊藤淳史助教と同志社大学歴史資料館の浜中邦弘准教授の検証を受けた。

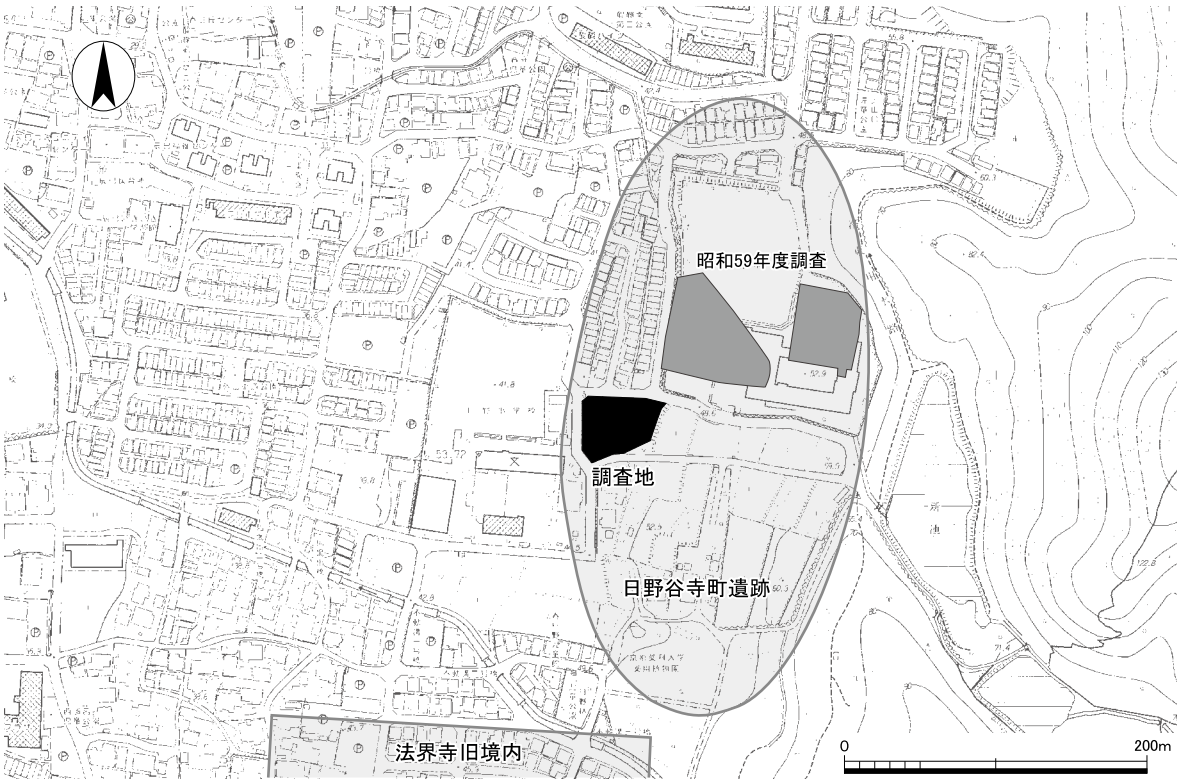


図１　調査位置図（１：5,000）

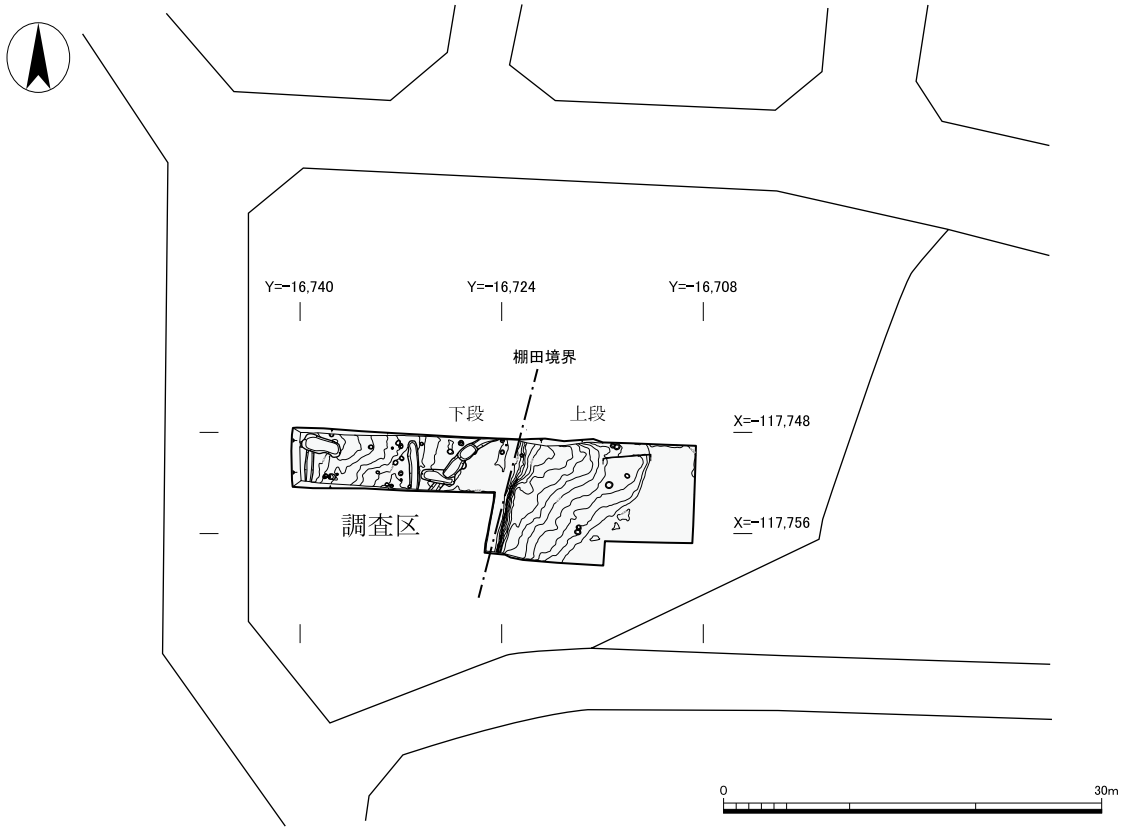


図２　調査区配置図（１：600）

図３　調査前全景（北東から）

図４　作業状況（北東から）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

調査地は、京都市の南東部醍醐地域の日野北山西裾部に位置しており、日野谷寺町遺跡にあたる。北約400ｍには栢ノ杜遺跡が、南約500ｍには法界寺境内遺跡が存在する。

栢ノ杜遺跡は、平安時代末に建てられた醍醐寺の子院跡で、大蔵卿堂、九躰丈六堂、三重塔、庭園などの存在が知られている。法界寺は、永承6年（1051）に日野資業が、薬師堂を建て日野家の菩提寺としたのが始まりと言われている。このように、当地の南北では平安時代以降、寺院が建てられているが、当地周辺に関する史料は少なく、遺跡の存在も殆んど確認されておらず、歴史性については明らかではなかった。

しかし、昭和59年に今回の調査地の北東で醍醐中学校南分校（現春日丘中学校）の新設に伴い試掘調査が行われた。その結果、縄文時代の土坑・集石、奈良時代の土坑、鎌倉時代の土坑・溝などの遺構と縄文土器及び奈良時代から室町時代までの土師器・須恵器などの遺物が確認された。これらの成果から、縄文時代から室町時代にいたる複合遺跡として認知されることとなった。

（２）既往の調査（図１）

これまでに行われた日野谷寺町遺跡の調査は、先に述べた昭和59年の試掘調査の後、同じく昭和59年に醍醐中学校南分校（現春日丘中学校）新設に伴って行われた発掘調査[1)]のみである。調査では、縄文時代の石囲炉・焼土坑・土坑、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物、平安時代の集石・土坑、平安時代後期から鎌倉時代にかけての建物・石組井戸・柵・集石墓、室町時代の流路などを検出している。

註

1）　菅田 薫ほか「日野谷寺町遺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

３．遺　　構

（１）基本層序（図５）

調査地は、上下２枚の棚田であった場所であり、現地表の標高は東側の上段が46.1ｍ、西側の下段が44.7ｍである。以下で、上段・下段に分けて堆積状況を述べる。

まず上段の東側では、地表下約0.1ｍまでが黄褐色粘質土（耕作土１）で、その直下が地山となる。一方で、西側では、地表下約0.1～0.2ｍまでが黄褐色粘質土（耕作土１）、その直下に約0.1～0.6ｍの明褐色砂礫、さらに約0.1ｍ黒褐色細砂、約0.1～0.3ｍの褐色粘質土（耕作土２）、約0.3ｍの黄褐色細砂（床土）、そして地山となる。

次に下段の東側は、上段の東側と同様に、地表下約0.2ｍまでが黄褐色粘質土（耕作土１）で、その直下が地山となる。下段の西側は、地表下約0.1～0.2ｍまでが黄褐色粘質土（耕作土１）、その直下に約0.1～0.6ｍの明褐色砂礫、約0.1～0.3ｍの黒褐色細砂、約0.1～0.2ｍの黄褐色粘質土（耕作土２）、約0.1～0.2ｍの褐色シルト（中世の整地層）、そして地山となる。

中世の整地層は下段のみで確認した。調査は地山上面で行った。

（２）遺　構（図６、図版１）

今回の調査で検出した遺構の総数は、35基である。

検出した主な遺構は、鎌倉時代から室町時代の柵１、溝15・16・33、柱穴１・27・31・34などがある。おおむねY=－16,722以西の下段に遺構が集中している。

柵１（図７）　調査区の西側で検出した南北方向の柵である。３基の柱穴を検出し、一番北側の柱穴11は、地下式礎石を有する。柱穴の規模は、径約0.4ｍ、深さ0.1～0.15ｍである。柱間は不等間で、北側が約0.9ｍ、南側が約1.2ｍである。12世紀末から13世紀初頭の土師器が出土した。

溝15　柵１の東隣で検出した南北方向の溝である。検出規模は、南北約4.0ｍ、幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍである。中世の整地層上面で成立していることが北壁断面でも確認できたことから、調査区の南北に延長すると考えられる。14世紀の土師器が出土した。

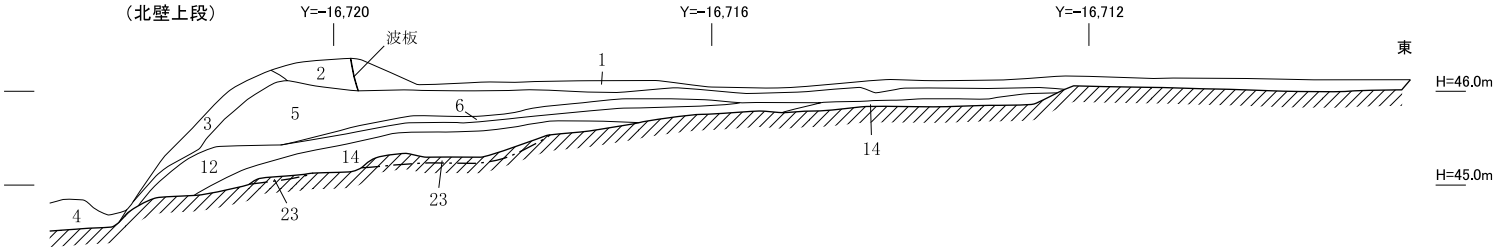
溝16（図８、図版１）　調査区の東西中央で検出した北東から南西方向に延びる溝である。検出長約5.5ｍ、幅約1.0ｍ、深さ約0.25ｍで、一部が約0.55ｍまで深く掘り込まれる。断面形状は、基本的にはU字形だが、深く掘り込まれた箇所は逆台形状を呈する。遺構の主軸方位は、北に対して約43度東に振れる。13世紀前半の土師器や常滑産の焼締陶器小片が出土した。

表１　遺構概要表

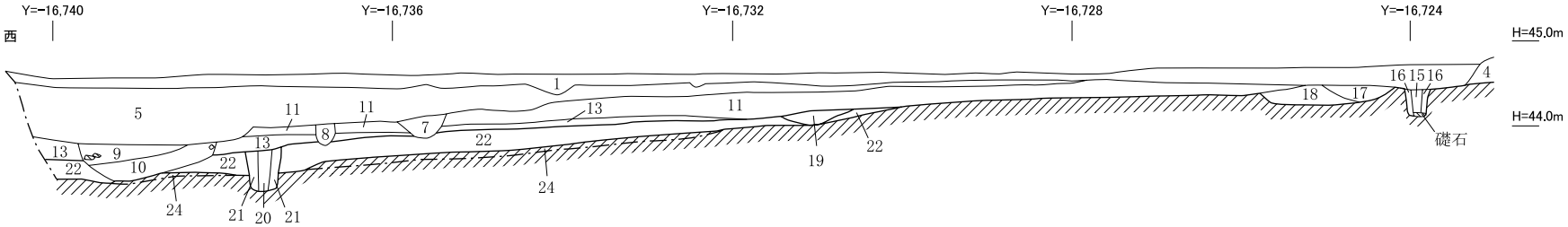
時　　代	遺　　構	備　　考
鎌倉時代 ～室町時代	柵１、溝15・16・33、柱穴１・27・31・34など	

北壁

（北壁上段）

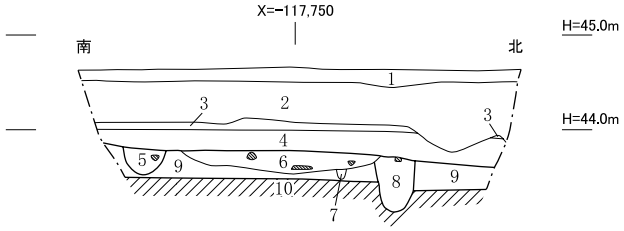


（北壁下段）



1　2.5Y5/3　黄褐色粘質土（耕作土1）
2　2.5Y5/4　黄褐色シルト（畦畔構築土）
3　2.5Y5/4　黄褐色細砂　φ2～5cmの礫含む
4　2.5Y5/4　黄褐色シルト（畦畔構築土）
5　7.5Y5/8　明褐色砂礫
6　10YR2/2　黒褐色細砂　土師器片・炭化物含む
7　10YR5/8　黄褐色砂礫　炭化物・φ15cmほどの礫含む
8　2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト　土師器片含む
9　10YR5/4　にぶい黄褐色細砂～粗砂　土師器片・炭化物含む
10　10YR4/4　褐色細砂　土師器片・炭化物含む
11　10YR2/2　黒褐色細砂　土師器片・炭化物含む
12　10YR4/6　褐色粘質土　土師器片・炭化物含む（耕作土2）
13　10YR5/6　黄褐色粘質土　土師器片含む（耕作土2）
14　10YR5/6　黄褐色細砂　炭化物含む（床土）
15　10YR6/6　明黄褐色細砂　炭化物含む ┐（柱穴31）
16　10YR5/6　黄褐色細砂　炭化物含む ┘
17　10YR4/4　褐色シルト　土師器片含む ┐（溝16）
18　10YR4/4　褐色シルトに ┘
　　7.5Y5/8明褐色細砂ブロック混じる
19　10YR4/4　褐色シルト　土師器片含む（溝15）
20　10YR4/6　褐色細砂　土師器片含む ┐（柱穴27）
21　10YR4/4　褐色細砂　土師器片含む ┘
22　10YR4/6　褐色シルト　土師器片・炭化物含む（中世整地層）
23　7.5YR5/6　明褐色砂礫（地山）
24　7.5YR5/8　明褐色砂礫（地山）

西壁



1　2.5Y5/3　黄褐色粘質土（耕作土1）
2　7.5YR5/8　明褐色砂礫　炭化物・φ5～15cmの礫含む
3　10YR2/2　黒褐色細砂　土師器片・炭化物含む
4　10YR5/6　黄褐色粘質土　土師器片・炭化物含む（耕作土2）
5　10YR3/4　暗褐色シルト　土師器片・炭化物含む
6　2.5Y4/6　オリーブ褐色シルト　土師器片・炭化物・φ5～10cmの礫含む
7　10YR4/4　褐色シルト　土師器片・炭化物含む
8　2.5Y4/4　オリーブ褐色細砂　土師器片・炭化物含む（柱穴34）
9　10YR4/6　褐色シルト　土師器片・炭化物含む（中世整地層）
10　7.5Y5/8　明褐色砂礫（地山）

0　5m

図5　調査区北壁・西壁断面図（1：80）

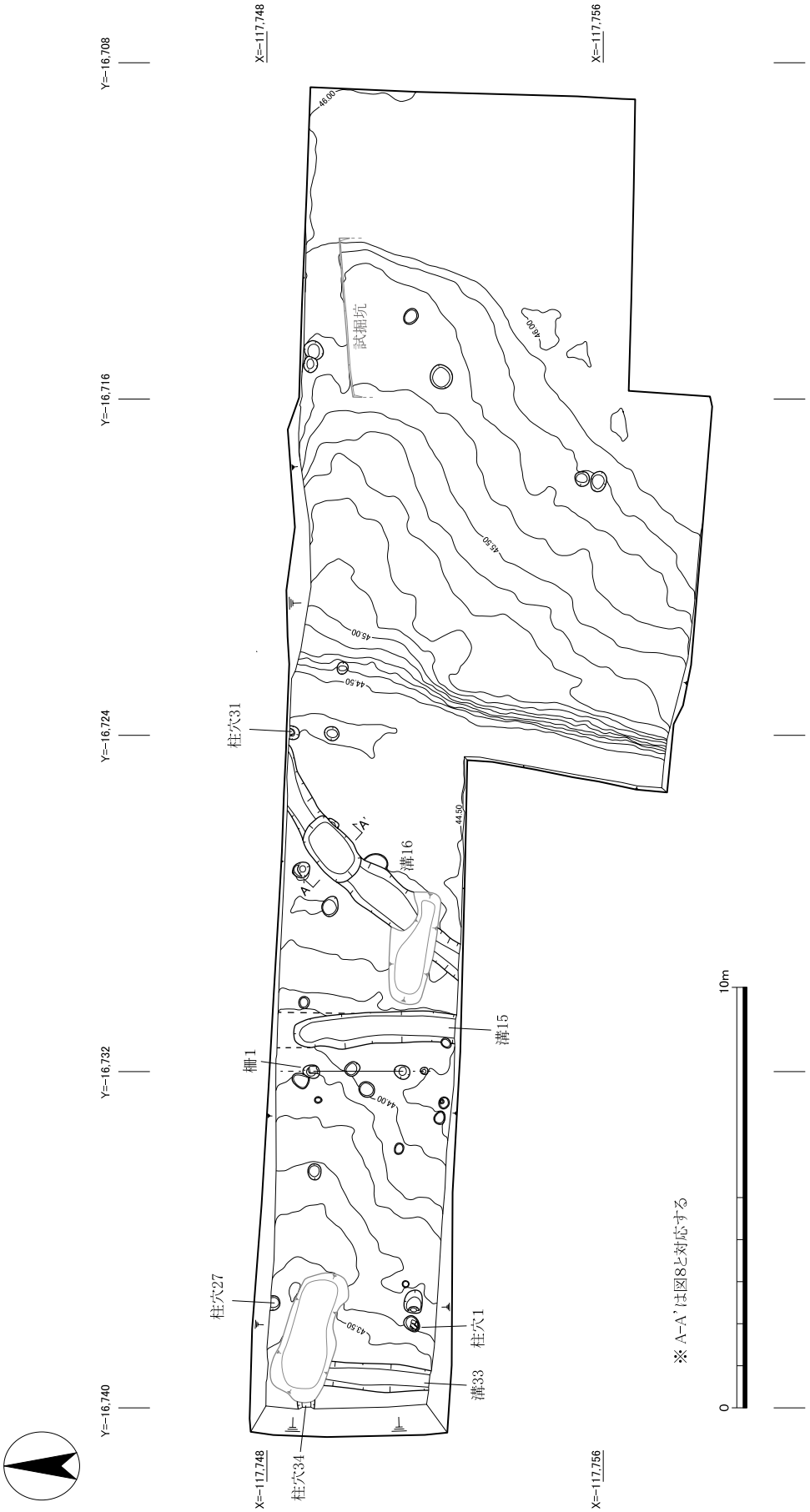
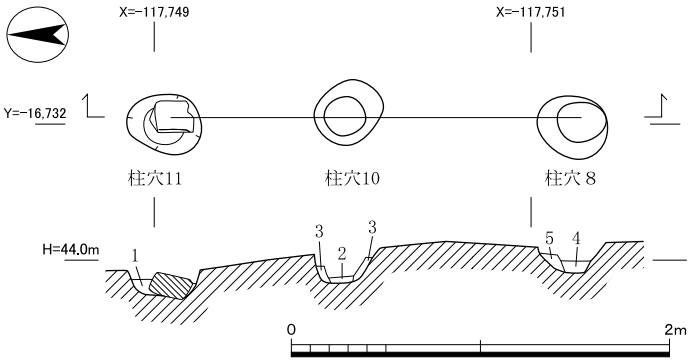
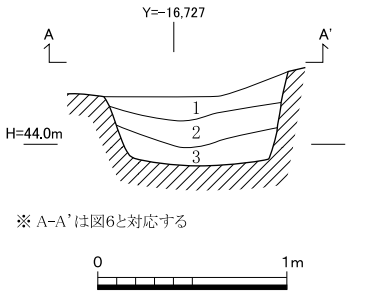


図６　調査区平面図（１：150）



1 10YR4/6 褐色細砂(粘性有)
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘性有)
3 10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘性有)
4 10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘性有)
5 10YR4/6 褐色細砂 φ2cm程の礫含む

図７　柵１実測図（１：40）



1 10YR4/4 褐色シルト(粘性有) 炭化物含む
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(粘性有)
土師器片・炭化物含む
3 10YR4/6 褐色シルト(粘性有) 炭化物含む

図８　溝16断面図（１：40）

溝33　調査区西端で検出した南北方向の溝である。南北約2.5ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約0.2ｍである。中世整地層上面で成立している。調査区外南側へは延長するが、北側は削平されており不明である。

柱穴１　調査区西端南側で検出した柱穴である。検出規模は、径約0.2ｍ、深さ約0.2ｍである。径約0.2ｍの地下式礎石を有する。

柱穴27　調査区西端北側で検出した柱穴である。検出規模は、径約0.3ｍ、深さ約0.2ｍである。中世整地層上面で成立している。

柱穴31　調査区中央北側で検出した柱穴である。検出規模は、径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍである。径約0.2ｍの地下式礎石を有する。

柱穴34　調査区西端北側で検出した柱穴である。検出規模は、径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍである。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理箱にして３箱出土した。種類は、土器類が土師器・須恵器・瓦器・常滑産焼締陶器があり、瓦類は丸瓦と平瓦がある。

なお、土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の編年に拠った[1)]。

（２）土器類（図９）

出土した土器は、全て小片であり、口径の復元はできなかったため、断面図のみ提示する。

１～４は土師器皿である。いずれも皿Ｎ系統である。

１は柵１から出土した。口縁部内外面ともにヨコナデ。口縁端部が上方に突出し、断面が三角形を呈する。６Ａ～Ｂ段階に位置づけられる。

２は溝16から出土した。口縁部外面は強いヨコナデ。６Ｂ～Ｃ段階に位置づけられる。

３・４は溝15から出土した。口縁部が開き、体部は直線的である。８Ａ～Ｂ段階に位置づけられる。

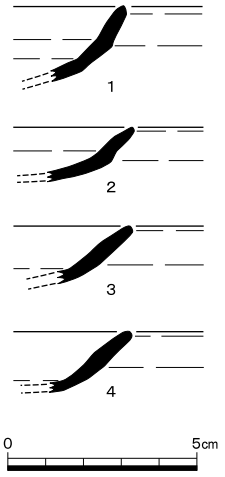


図９　土器実測図（１：２）

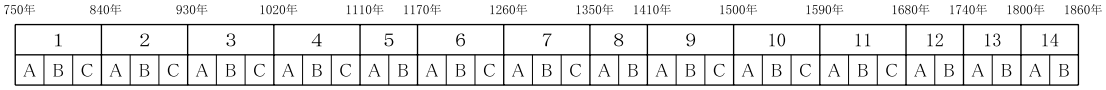
表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、丸瓦、平瓦		土師器皿４点		
合　計		４箱	４点（１箱）	０箱	３箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

註

1）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年



５．ま と め

（１）今回の調査成果

今回の調査では、鎌倉時代から室町時代の南北方向の柵１・溝15、北東から南西方向の溝16などを検出した。南北方向の柵１と南北溝15は近接しており、これらが組み合わさり区画施設を構成するか、もしくは出土遺物の年代から鎌倉時代前半に柵１が先行して設けられ、その後、室町時代に溝15が掘られた可能性が考えられる。溝16は、斜面地の裾部に斜面の傾斜に沿って掘られており、また一部が深く掘り込まれていることから、斜面裾部の排水溝としての機能を果たしていたと考えられる。平安時代以前の遺構に関しては、今回は確認することができなかった。このことから、今回の調査区では中世に開発が始まったことがわかる。また、中世の整地層に関しても、調査区の下段でのみ確認しており、さらに上段では遺構密度が極端に低くなることから、今回の調査区の中でも、中世の開発は西半部に限られることがわかった。

調査区北東で行われた昭和59年度の調査では、鎌倉時代以降の建物や柵列などが検出されている。出土遺物は、今回の調査と同様に小片が多く、詳細については不明であるが、６Ａ～Ｂ段階に位置づけられる12世紀末から13世紀前半にかけての土師器片が比較的多数見られたことから、鎌倉時代前半頃から開発が行われたものと考えられる。この点に関しては、今回の調査成果とも合致しており、当地周辺の開発が鎌倉時代に行われたことは間違いない。しかしながら、今回の調査地と昭和59年度の調査地は標高が異なり、またその間約70ｍでは同時期の遺構が検出されていない。これらが関連する遺構群なのか否かについては検討が必要である。

また、昭和59年度の調査では、中世だけではなく縄文時代や飛鳥・奈良時代の遺構を検出している。次項で詳しく述べるが、飛鳥・奈良時代に関しては、建物が計11棟検出されており、いずれも掘立柱建物で整然と建ち並んでいる。また、調査区の西端では南北方向の溝SD452を検出している。こうした遺構群は今回の調査地まで広がっておらず、限られた範囲に展開していた可能性が考えられる。

（２）昭和59年度の調査成果（図10～12、表３）

昭和59年に今回の調査地の北東部で、醍醐中学校南分校（現春日丘中学校）の新設工事に伴い発掘調査が行われた。この時の調査成果は概要報告のみで詳細な報告がなされていない。ここでは特異な遺構・遺物が検出されている飛鳥・奈良時代の調査成果を中心に再整理して報告する。

調査区は東西に並び、東側がＡ区、西側がＢ区である。飛鳥・奈良時代の遺構は主にＢ区で検出されている。主な遺構としては、上述した掘立柱建物11棟と南北溝SD452に加え、Ａ区中央東側で検出した土坑SK10である。土坑SK10からは蔵骨器が出土している。

掘立柱建物は11棟の内９棟が２間×３間で、東西棟が４棟、南北棟が５棟である。２棟は２間×２間の総柱建物である。SB113とSB465、SB91とSB206は新旧関係があり、柱穴の重複関係か

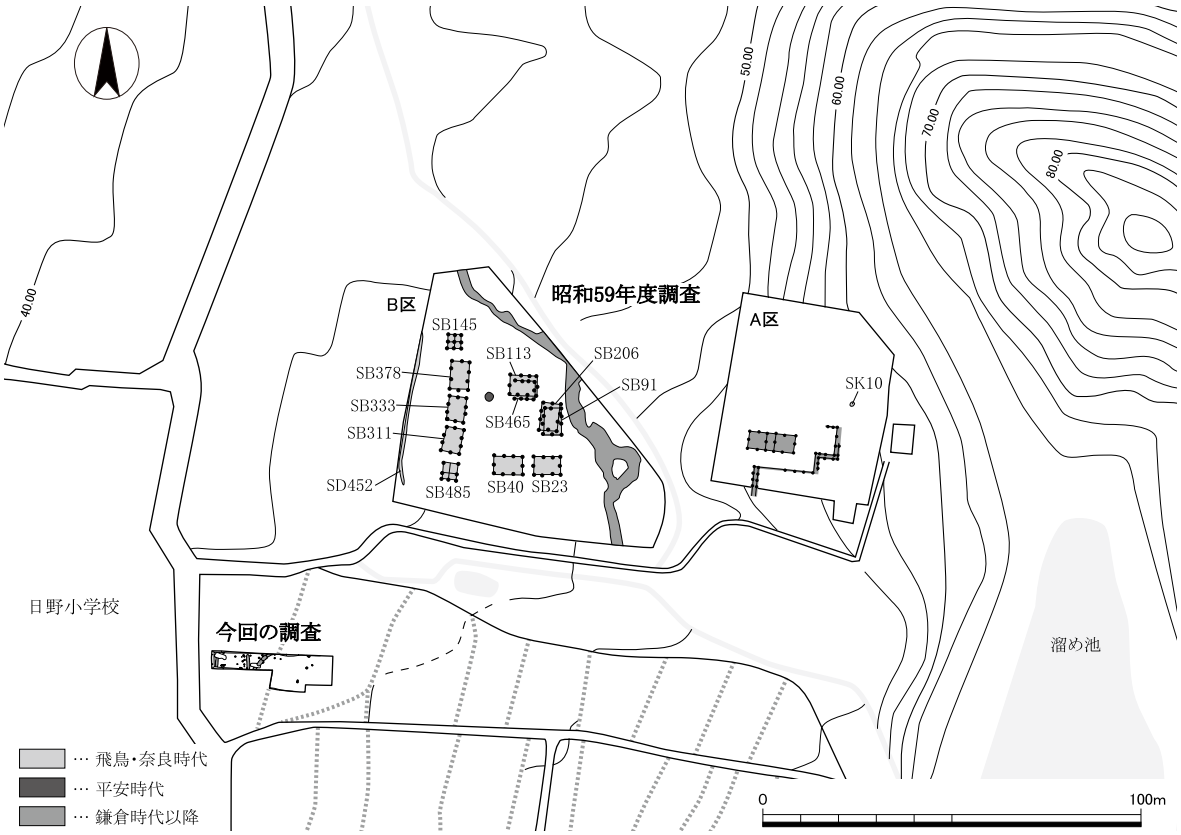


図10　今回調査及び昭和59年度調査遺構配置図（1：2,000）

ら、それぞれSB113とSB206が先行する。各建物の詳細については表３に記載した。

また、これらの建物群の西側には南北方向の溝SD452が存在しており、区画施設としての機能を果たしていたと考えられる。この溝が敷地内の区画施設なのか敷地境の区画施設なのかは、西側が調査範囲外のため不明である。この溝SD452からは７世紀後半から８世紀初頭、飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置づけられる土師器（図11－１～３）や須恵器（図11－４～７）が出土している[1)]。１は、底部外面に「賀茂」と墨書で記されている[2)]（図12）。

表３　昭和59年度調査　建物一覧表

遺構名	建物規模	建物方位	梁行(m)	桁行(m)	柱間(m)		掘形規模(m)
					梁行	桁行	
SB23	2間×3間	東西棟	4.5	6.8	2.2～2.3	2.1～2.25	0.7～1.0
SB40	2間×3間	東西棟	4.6	7.6	2.1～2.5	2.5	0.8～1.0
SB91	2間×3間	南北棟	4.1	6.3	2.0～2.1	2.0～2.2	0.7～0.9
SB113	2間×3間	東西棟	5.0	7.2	2.4～2.7	2.3～2.4	1.0
SB145	2間×2間	―	3.5×3.5		1.7～1.8		0.7～0.9
SB206	2間×3間	南北棟	4.5	6.4	2.2～2.3	2.2～2.3	―
SB311	2間×3間	南北棟	5.0	6.4	2.5	2.1～2.4	0.6～0.7
SB333	2間×3間	南北棟	4.6	6.4	2.5	1.8～2.4	0.6～0.8
SB378	2間×3間	南北棟	4.3	7.1	1.9～2.4	2.3～2.6	0.7～1.0
SB465	2間×3間	東西棟	4.2	5.4	2.0～2.2	1.5～1.9	0.7
SB485	2間×2間	―	4.4×4.4		2.0、2.4	1.5、2.9	0.7

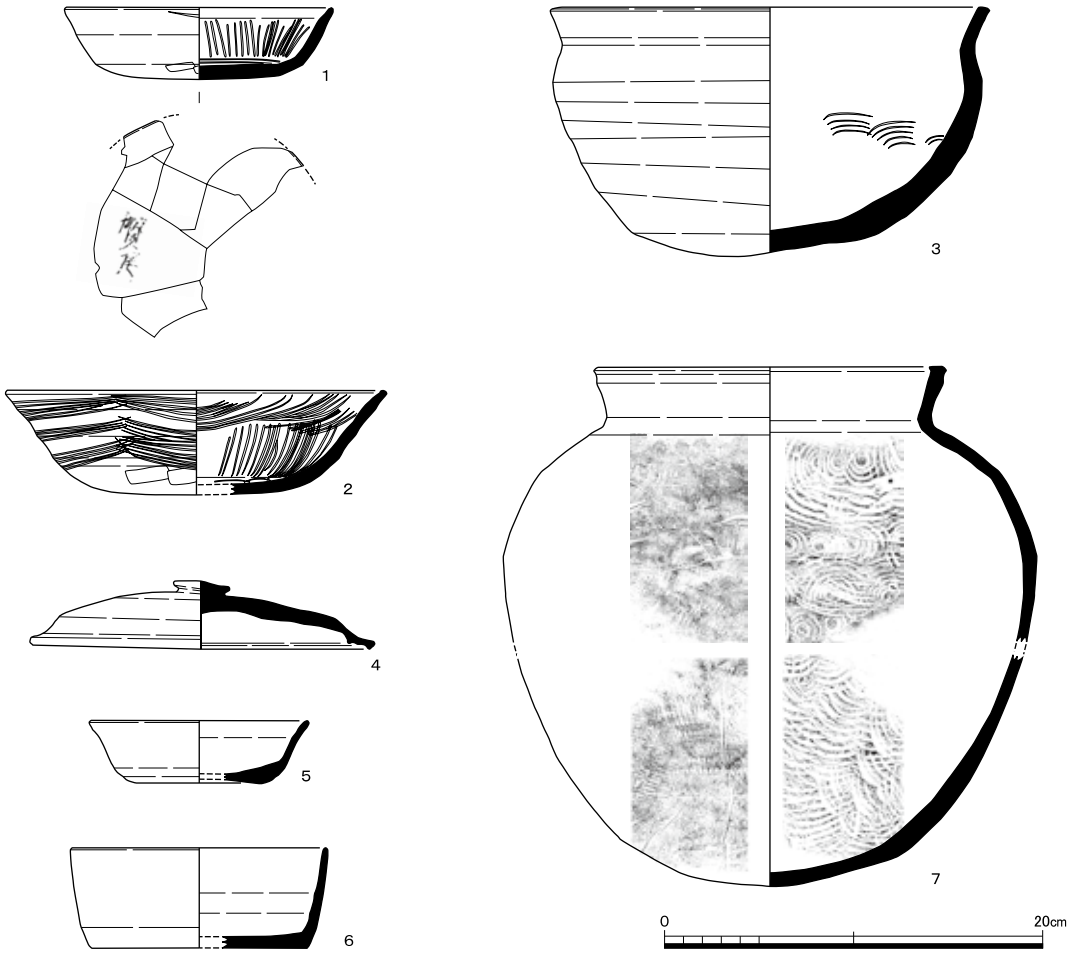


図11　昭和59年度調査SD452出土土器実測図（1：4）

以上が昭和59年度調査で検出した主な飛鳥・奈良時代の遺構である。報告では、掘立柱建物の時期は奈良時代と考えている、と記載されているが、溝SD452と同時期の建物群と考えれば7世紀後半まで遡る可能性がある。一方で、京都市域でも古代の葛野郡や愛宕郡の集落跡で確認されている住居は、6世紀から7世紀にかけては竪穴住居が主体であるが、宇治郡に属するこの調査地で確認した住居はいずれも掘立柱建物である。こうしたことから当遺跡は、7世紀には掘立柱建物が主体となる南山城地域や大和と関連する可能性が指摘されている[3)]。また、「賀茂」と記された墨書土器の存在も特筆すべきであろう。この賀茂は、地名もしくは人名を指すものだと考えられるが、当地と地名の「賀茂」との結びつきは考えづらく、人名、つまり「賀茂氏」と関連する可能性が考えられる。掘立柱建物の建物配置や墨書土器の出土から、通常の集落とは異なる性格を有していることや、上述した南山城地域・大和と関連する可能性も考慮して、この遺跡を再考する必要があり、今後の課題である。

図12　墨書土器赤外線写真（図11－1）

最後に昭和59年度の調査地は、日野北山の丘陵の西側の裾部にあたり、調査地より西側は緩やかに下る傾斜地である。一方で、今回の調査地は丘陵の谷筋にあたり、昭和59年度調査地よりも低

地にあり、立地条件は近隣ながらも異なる。こうした点が、遺構の広がりを反映していると考えられ、飛鳥・奈良時代の遺構群は丘陵の裾部や尾根筋などの低地を見下ろすことのできる高台で展開していたと考えられる。

註

1） 西弘海「土器の時期区分と形式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所　1978年

2） 墨書土器の判読については、大阪大谷大学の竹本晃氏に御教示頂いた。

3） 古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ　集落遺跡の分析からみた社会変化』 六一書房　2021年

図　　版

1　調査区全景（北東から）

2　調査区下段全景（東から）

3　溝16（北東から）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ひのたにでらちょういせき
書　　名	日野谷寺町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－４
編 著 者 名	松永修平
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年11月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日野谷寺町遺跡（ひのたにでらちょういせき）	京都市伏見区（きょうとしふしみく） 日野谷寺町（ひのたにでらちょう） 81-1、82-1	26100	1162	34度 56分 18秒	135度 49分 1秒	2021年５月17日～2021年６月11日	233.5㎡	道路敷設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日野谷寺町遺跡	集落跡	鎌倉時代～室町時代	柵、溝、柱穴	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、丸瓦、平瓦	鎌倉時代から室町時代の柵・溝などを検出した。

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-4

日野谷寺町遺跡

発行日　2021年11月30日

編集
発行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印刷　三星商事印刷株式会社

住所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961